

《研究ノート》

蔡元培と小西重直

吉 川 榮 一

はじめに

日本と中国を代表する教育者として知られる二人の人物が、20世紀初頭のライプチヒ大学ですれ違った。一人は小西重直（1875年～1948年）。のちに京都帝国大学総長となる教育学者である。彼は、1902年春から1905年初めまで約3年をライプチヒで過ごした。いま一人は蔡元培（1868年～1940年）。1912年に中華民国初代教育総長（文部科学大臣に相当）となり、1916年末には北京大学総長に就任した教育思想家である。彼は、1908年秋から1911年秋までおよそ3年をライプチヒで過ごした。もとより二人はお互いの存在を知らないまま一生を終えるのであるが、この二人は、当時ドイツに巻き起こっていた教育改革運動の策源地の一つともいべきライプチヒに学び、同じような教育環境の中からそれぞれ異なった自分の信ずる教育の核心を見出していく。

蔡元培とドイツ

蔡元培は中華民国初代教育総長として、中国近代の教育行政の礎を築いた人物である。清朝末期において、科挙試験に優秀な成績で合格し中央官僚の一員として勤めていたが、1898年秋の戊戌政変後、官を辞して郷里の浙江省紹興に戻り、紹興中西学堂の「監督」職に就き、教育に軸足を置いて活動するようになっていった。

蔡元培はもともと康有為や梁啓超ら戊戌変法運動の担い手たちに共感を覚えていたものの、彼らが勢威盛んな折に彼らに依附することを潔しとせず、積極的に彼らに接近しようとはしなかった。戊戌変法運動の指導者の一人と目されていた梁啓超とは、同じ年に科挙の最終試験に合格した「同年」の間柄であり、いくらでも誼を通ずるすべがあったにもかかわらずである。結局、直接的交流を持つことのないまま、ほどなく戊戌変法運動は失敗に終わり、ある者は処刑され、ある者は日本に亡命を余儀なくされた。この事件が蔡元培の意識を変えたのだった。蔡元培は自伝の中に次のように記している。

小生はこのとき、変法派が失敗したのは、先に革新運動の担い手を育成することなく少数の

者が政権を奪取し守旧派を排斥しようとしたからであり、十分な力量を持たぬことが露わになって勢いを失っていかざるを得なかったのだと考えたのである。こののち北京政府には希望を持ってなくなり、故に中央官庁での職を棄て、教育界に身を委ねることを望んだのである。¹⁾

こうして教育界に足を踏み入れた蔡元培ではあったが、中正学堂では「堂董」(理事長)の徐樹蘭と衝突し職を辞すことになり、浙江省内でいくつかの学校の運営に携わったものの志を得ず、活路を見いだすべく1901年に上海に出て行く。上海では、南洋公学、愛国女学、愛国学社などの運営や設立に関わっただけではなく、上海の教育界の知友と「中国教育会」を發起し、蔡元培はその会長に推挙された。当時の上海は、東京とともに、清朝末期の革命運動の策源地であった。蔡元培もまたその高い人望の故に、革命の渦に巻き込まれていくことになる。1904年には浙江省出身者を中心に組織された革命団体「光復会」の会長に推され、1905年に「中国革命同盟会」が成立すると、蔡元培はその上海分会長に推薦されている。しかし、愛国の熱情は有してはいても、蔡元培は所詮旧来の学問を修めた知識人であり、革命の実際的な行動には向いているとは言えなかった。ドイツ語を自習していた彼の心の中で、ドイツに行って学問を究めたいという夢が次第に膨らんでいったようである。1906年、ドイツへの私費留学を清朝の教育行政機関である「学部」に願い出た文章に、蔡元培は次のように書いている。

小職はかねてより教育学を志しております。我が国の現行の教育制度は多くを日本にならっておりますが、日本の教育界で盛んに行われておりますのはドイツのヘルバルト学派であります。また幼稚園はドイツ人のフレーベルが創始したものであります。教育制度を強力に推し広めているのもまたドイツが第一であります。今ドイツの就学児童数は人口1000人につき161人を占めており、欧米各国の中で並ぶものではありません。小職はドイツ留学の志を抱いて、青島、上海などの諸処であらかじめドイツ語を学習して参りました。……中略……小職はいま自ら費用を準備し、ドイツに赴き、文科の学問を修め、教育原理や、かの国の現在の教育の状況を研究したいと計画いたしております。²⁾

この文章からは、蔡元培が早くから教育制度に関心を持ち、日本の教育制度がドイツに範を取っていることや、教育学の体系化に貢献したヘルバルトや幼児教育の祖とも言うべきフレーベルといったドイツの教育者についてもある程度の知識を有していたことが分かる。蔡はドイツ語より先に日本語を自習しており、話したり聞いたりすることはできなかったものの、日本語で書かれた書物を読んで理解することはできたから、ドイツの教育界についての知識も日本で出版された書物から得たものであろう。その意味では、ドイツの教育について、本稿で取り上げるもう一人の人物・小西重直と共通する予備知識があったとも考えられる。ともあれ、蔡元培が当初から教育制度、教育学に強い関心を持ってドイツ留学を目指していたことは注目しておかなければならない。

さて、蔡元培の思いが通じたのか、友人の孫宝琦(孫慕韓)が駐独公使に任じられることになり、蔡は孫宝琦に随行してドイツに行けることになった。その間の事情を蔡は「伝略」に次のように記している。

丁未の年（1907年）、孫慕韓君が駐独公使に任じられ、私に毎月三十両の学費を援助してくれることになった。また商務印書館と協議し、編集翻訳費として毎月百円を送金してもらうことになった。³⁾

かくして蔡元培は、孫宝琦に同行して1907年6月シベリア鉄道経由でドイツに赴いた。ベルリンに渡ったとき、蔡元培はすでに39歳になっていた。遅咲きの海外留学生である。なお、「伝略」中、一方で「三十両」と書き他方で「百円」と書いている理由は定かではないが、いずれにせよ、毎月十分な額の留学費用が確保できたわけである。さらに、一年間のベルリン滞在中、孫宝琦の紹介でベルリン在住の中国人の子弟四人に「国文」（古典中国語）を教えることになり、月々100マルクの家庭教師代にも恵まれている。このベルリン滞在中、蔡元培はドイツ語習得に励み、翌年の1908年秋になってライプチヒに移り、ライプチヒ大学の聴講生として本格的に勉学をはじめたわけであるが、我々はここで小西重直の留学にいたる経緯に目を転じることにしよう。

小西重直のドイツ留学

1901年7月、東京帝国大学文科大学哲学科を首席で卒業した小西重直は、8月に同郷の塩見元子と結婚して間もなく、教育学研究のため3年間のドイツ・イギリスへの留学を命ぜられた。帰国の暁には、開講予定の広島高等師範学校教授に就任するという内約を得た上での留学であった。発令は1901年9月30日、出発は翌1902年2月23日であった。1875年生まれの小西はこのとき満27歳である。蔡元培より一周り若い、青年研究者であった。なお、小論における小西重直の事績については全て、加藤仁平著『小西重直の生涯と思想』（黎明書房、1965年）に依拠しているが、加藤氏の記すところに拠れば、留学当時の模様を小西自らが描き出している著述としては、「教育研究の懺悔」（『学校教育』昭和3年1月号）、「私の教育思想を辿りて」（『教育』昭和9年1月号、岩波書店）、「私の生活と教育思想」（昭和9年宮崎県で行った講演の記録）の三つがあるという。この三つの資料を通覧する限り、加藤氏も指摘しているように、留学に関する記述について三者の記述に大きな差はなく、留学に際して特別の思い入れがあったようには窺えない。帰国後20年余を経た1928年、小西は次のように記している。

広島高等師範学校に赴く約束で、外国に留学を命ぜられてから、ようやく身を入れて教育学に関する書を研究することになったのであります。けれども、外国に渡ってからも、教育そのものには従来通り多大な興味を有して居りましたが、教育学に対しては最初の程はむしろ反感さえ抱いて居たくらいであります。⁴⁾

つまり、小西重直当人の希望ではなく、前途有望な優秀な学徒に近代的な教育学を学ばせるという文部省の命令によって、否も応もなく洋行を余儀なくされたわけである。この間の事情を、小西の弟子の長田新はあけすけに次のように語っている。

（小西先生は）洋行しておる間は教育学はきらいだったのだ。洋行させられて帰ってくるや、広島高等師範学校で教育学の講義をしなければならぬということになったが、全然むこうではやらなかった。⁵⁾

「全然むこうでは（教育学の勉強は）やらなかった」小西は、「寧ろ宗教や文芸に関する書例えば、トルストイの宗教論や、芸術論や、生活意義などといった様な書物を買って之を読んで楽しみ、後には独逸詩人の詩集等を繙いてなぐさんだ次第」であった。⁶⁾

「独逸を学問的に利用せんとするよりも、ローマンティックに味わうという気が多かった」と自ら回想している小西重直ではあるが、実際には毎日規則正しい生活を送り、大学の講義にもきちんと出席している。東京帝国大学哲学科を1895年に卒業し、小西と同じく1902年にドイツに留学していた先輩の教育学研究者・熊谷五郎に宛てた絵はがきに自らの留学生生活を次のように伝えている。

小生之れ迄の生活の方法は大抵次の如くに御座候。朝七時三十分頃起床、八時三十分頃より十時半まで読書、夫れから語学の先生へ至り、十一時より十二時半迄稽古、一時半より二時五十分頃迄、パンションにて昼食致候。非常に親切に候。

夜は六時半頃、食事店へ参り候。丁度ギムナジウムの老先生と何時も食卓を共にし色々話致居候。食後は独り森の中を散歩致し、大抵八時四十分頃帰宅、十一時には寝に就き申候。（1902年7月31日執筆、同日消印）

小生当地に参り候以来、溝淵先生の御注意を守り、当分は専ら語学専門の心組に候処、小生の主眼と致したる「フォルケルト」氏の教育学講義は、来学期は無之候に付き、籍を聴講生に置いて一週三時間通学致居候。同教授の講義は非常に明瞭にして独乙語半解の小生にも大抵了解致され候。金子氏の如きは一々筆記することも出来る位なりと申居られ候。同氏の講義は全く特別に候。……中略……

「フォルケルト」教授の言語は、明瞭、議論は哲学と人生とを達観したる結果の様に思はれ、小生には非常に面白く候に付き、小生は同教授の指導の下に今後少くとも三学期位、在学致度存居候。（1902年7月30日執筆、7月31日消印）⁷⁾

「日本人となるべく談話せざること至極よろしきこと」と書簡の中に記しているほど、小西は日本人との交際を出来るだけ避けてまでドイツ語習得に力を入れており、ドイツ語教師の下で学ぶだけではなく、自分以外に日本人のいない寄宿先を選び（同宿者はドイツ人4人、アメリカ人4人、ハンガリー人1人）、夕食時にもドイツ人老教師と同席しドイツ語習得に励んでいる（熊谷五郎宛の絵はがきの記述による）。このような生活の中で次第にフォルケルト教授に傾倒していくさまが絵はがきの中に率直に描かれていて、非常に興味深い。後年の回想でも、小西は次のように記している。

丁度当時、彼の地の大学にはフォルケルト教授が教鞭を執って居られるのであります。フォルケルト教授は誰人も御承知の如く美学の大家であって、又哲学に於ても堂々たる学者であり、又教育的の思想も深い人であります。私は此の先生のもとに行って、色々と教を受けました。

私はもともと芸術も分らずながら好きでありましたから、此の方面について学ぶ上に特に都合がよかったのであります。⁸⁾

其の頃のライプチヒ大学には、其の当時の大立物であったヴント教授が居り、日本でも独逸でも色々の方面の学問にヴントの名が出ないものはないと言ったような素晴らしい勢力であった。私もヴントという学者は偉い学者であるとは思っていたが、どう云うものか、ヴントの思想から引きつけられるものがあまりなかったので、私の教育思想の中にもヴントの影響は意識的組織的には考えられない程稀薄であったと信じて居る。

元来私がライプチヒ大学を目指して行っただけなのは、ヴントというような世界的な学者が其処に居るということも暗々裏に力になったと思うが、実は直接に指導を受けようとして憧憬して居たのはフォルケルト教授であった。……中略……私は滞独二カ年半の間全く同教授の指導を受け、其の一家の人々にも非常に世話になったのである。⁹⁾

ヨハネス フォルケルト (Johannes Volkelt, 1848 - 1930) は、大瀬甚太郎『最近世欧米教育史』(成美堂書店, 1916年)において「現代美学の代表者」(418頁)とたたえられている、19世紀末から20世紀初頭を代表する哲学者・美学者である。森鷗外も、フォルケルトの「美学上の時事問題」(1895年)を「審美新説」という題名で翻訳し、フォルケルトの感情移入美学を日本の文芸界に紹介している。¹⁰⁾ 小西自身も、のちに『現今教育の研究』において、フォルケルトを次のように讃えている。

若夫美もしそれの定義を尽く列举せんには百余にして尚足らざるものあり。吾人の教育上最も参考として研究すべきはフォルケルト教授の美学論なり。教授は余が恩師にして目下ライプチヒ大学の教授として教育学、美学、哲学の講座を担当す。余は約二年教授の恩顧を受け、其家族に接近し、常に教授の人格と学識とに敬服し、亦其家族の懇情に感ずるものなるも、子弟の情の私心を以て特に教授の学説を立てんと欲するにはあらず。¹¹⁾

上記の複数の引用から、小西重直がこのフォルケルト教授を深く尊敬し、その一方で「当時の大立物」ヴント教授には惹きつけられるものを感じていなかったことがよく分かる。小西はフォルケルト教授に心酔するあまり、同じライプチヒ大学のヴント教授を慕うドイツ人学生とあわや決闘騒ぎを演ずることになりかけたという。

ある日、大学内を散歩しながらヴント Wundt 論をはじめました。当時はヴントの全盛時代でした、専門の心理学はもとより哲学にも教育学にもヴントのものはでてきたものであります。彼はフォルケルト以上に有名でした。私生意気にも「ヴントはなるほど偉い学者である。しかし彼の形而上学は浅いじゃないか。」という、相手の学生は怒り、目をむいて反駁しました。¹²⁾

ヴントに心酔するそのドイツ人学生から一週間後に送られてきた書状を決闘状と勘違いした小西は、ベルリンにいる日本の軍人から日本刀を借りに行くことさえ考えたという。決闘を申し込まれ

たと誤解するほどに、ドイツ人学生相手にヴントを批判した小西であったが、実は、小西がフォルケルト教授に心酔していたのに対して、いっぽうの蔡元培はドイツ人学生同様にヴント教授に深く傾倒していたのである。

蔡元培とヴント

ライプチヒ大学に入学して以来、「哲学史、文学史、文明史、心理学、美学、美術史、民族学などの講義はすべて聴講した」と蔡元培はのちに回想している。¹³⁾ そんな蔡元培がもっとも熱心に学んだのは、当時ようやく確立されつつあった実験心理学であった。

私はかねてより哲学を研究してきたが、のちにドイツに留学してから、哲学の範囲が広すぎると感じ、研究範囲をいささか縮小しようと考え、実験心理学を専攻することにした。その頃一人のドイツ人教授がおり、彼は実験心理学を研究するかたわら、さらに実験的美学をも研究していた。私は彼らドイツ人の著した美学書を読んでみて、これまた非常に気に入る、そこで私は美学を研究することにした。¹⁴⁾

蔡元培がここで言う「一人のドイツ人教授」とは、ヴィルヘルム・ヴント (Wilhelm Wundt, 1832-1920) のことである。1875年にライプチヒ大学に着任したヴントは、実証的な心理学の確立を目指して研究を進め、当時彼の心理学研究とその心理学実験室は注目を集めていた。のちに「実験心理学の祖」と讃えられるヴントの講義を、蔡元培はライプチヒ大学在籍中每学期欠かさず聴講してだけでなく、ヴントの哲学史についてドイツ人学生に補足的説明をしてもらい、講義で不明瞭だった部分を補う努力までしている。¹⁵⁾ さらにその後、ヴントの心理学実験室に出入りを許され、教員の指導の下、各種官能感覚の遅速などの実験に参加している。¹⁶⁾

蔡元培が留学中に聴講していたヴントの講義は次の通りである。

1908年冬学期	「カントから現代に至るまでの新哲学の歴史」
1909年春学期	「心理学」
1909年冬学期	「新哲学の歴史および初期の心理学概論」
1910年春学期	「心理学実験室」
1910年冬学期	「心理学実験室」
1911年春学期	「民族心理学」、「心理学実験室」 ¹⁷⁾

もとより、蔡元培がライプチヒ大学での3年間に聴講した講義はあわせて40コマになるから、ほかにも多くの教授たちの講義に接している。蔡元培は自身が聴講した講義について次のように記している。

ヴントの心理学あるいは哲学史（心理学と哲学史はそれぞれ隔年開講で、週1コマ4時

間)、フォルケルト (Volkert) の哲学、ランプレヒト (Lamprecht) の文明史、シュマルソー (Schmarsow) の美術史、そのほかさらに文学史や何々文学など。¹⁸⁾

すでに拙稿「蔡元培の美育論」で指摘していることではあるが、陶英恵が明らかにした聴講記録に拠れば、ライプチヒ大学留学中に蔡元培が受講したのは14名の教員による40コマの講義である。14名の教員のなかには、ヴントやフォルケルト以外にも、リップス (Lipps)、リヒター (Richter)、シュマルソー (Schmarsow) など、美学や美術史の領域で優れた業績を残した学者たちがいるし、ヴントを介してモイマン (Meumann) から教えを受けている。ヴントのもとで実験心理学を学んだモイマンの指導の受けた蔡元培は、自ら美学上の実験を行ったことを蔡元培は後年次のように回想している。

その頃、ヴント派の学者であるモイマン教授もたまたまこの大学にいた。彼は心理学実験の方法を教育学や美学に応用していた。…… (私も) 彼のやり方にならって、美学上のちょっとした実験をやってみようと思った。¹⁹⁾

蔡元培は実際数十人を被験者として、「美」というものの共通性を探ろうとしたようである。実験半ばにして帰国することになったため、これといった成果は得られなかったものの、彼のこうした行動からも美学に強い関心を抱いていたことがよくわかる。蔡元培自身、ヴントをはじめとする人々に影響を受けて美学に強い関心を抱くに至る経緯を次のように語っている。

教室で絶えず美学、美術史、文学史等の科目を聴講しただけでなく、生活環境においても音楽的、美術的雰囲気の影響を常に受けたため、知らず知らずのうちに美学方面に次第に関心が集中していった。とりわけ、ヴントが哲学史を講じた折、カントの美学に関する見解を取り上げて、美の超越性と普遍性を最も重視したので、私はカントの原書を詳細に研究し、ますます美学問題の重要性を感じるようになった。²⁰⁾

大学における講義のみならず、生活環境の中の芸術的な雰囲気も相俟って、蔡元培が次第に「美」というものを意識するようになった様子がよく窺える。そしてさらに、蔡元培が美学に関心を抱くようになっていった背景には、蔡がドイツに留学する直前に沸き起こった「芸術教育運動」の余韻も深く関係していたに相違ない。蔡より5年早くドイツに留学した小西重直は次のように語っている。

其の当時独逸では、芸術教育に就いて盛に論ぜられて居ました。我が日本の国では之までそんな芸術教育等については全く論ぜられたことはないのでありますから、之は少なからず私の注意を引いたのであります。そこで、私は早速芸術教育に関する書を求め、之を読んでみたのでありますが、多大の興味を覚え、大いに趣味を持ち得るに至ったのであります。²¹⁾

上記回想では、小西もまた芸術教育すなわち美育に関心を抱いたことのみが語られているが、教

育学者として往時について述べた文章では、より学術的な視点から次のように述べている。

数年前余が独逸に滞在せる頃、此問題は教育界の一大研究問題となり、或はドレスデンに於て、又はワイマーに於て、此問題に関する教育会を開催し、著書に雑誌に一時盛なる研究状態を呈し、ランゲ教授の「独逸青年の芸術教育」ラインの「校舎論」の如きは教育者の間に愛読せられ、殊にハンプルク市に於てはリヒトワルク等主唱となり、絵画の鑑賞、音楽演奏会その他の方法によりて児童の趣味教育を実行せり。其後独逸の教育界に於ては、勤労学校的教風等の研究問題盛にして、趣味教育問題は其の当時の如く活気を帯びず。然れども其研究は漸次着実の態度を取り、其利弊に関して冷静に判断する状況なるを見る。²²⁾

小西が回想している「教育界の一大研究問題」をめぐる活動は、こんにち「芸術教育運動」と呼ばれている。「芸術教育運動」は、それまでの知性重視の教育の克服を目指して始まった教育改革運動の大きな柱であり、新しい教育は人間を創造的個性として育成せねばならず、創造的個性は芸術によってのみ培われると考えたのである。こうした芸術教育運動の熱がなにがしか残っている中に小西重直と蔡元培は身を置くことになったわけである。

小西重直の「労作教育」、蔡元培の「美育」

さて、小西重直が留学した当時、芸術教育運動はすでに最盛期ほどの熱気を失い、勤労学校などについて関心が移っていったようであるが、小西自身は留学中、労作教育と同じくらい芸術的教育にも関心を抱いていたことが、1930年に発表した彼の主著の一つ『労作教育』の「序」から窺える。

今から三十年許り前のことである。私が独逸に留学中、労作教育や芸術的教育に関する思潮が独逸の教育界では盛に論議され、若い私の頭に少なからざる刺激を与えた。労作教育に就いては、私は私の子供の頃や学生時代のささやかな経験などを想起しこれと結びつけて考えて見たこともある。芸術的教育に至つては、その当時の私には殆ど全く新しい思潮であった。そして帰朝早々、私はこれ等二つの思潮を結合し、「趣味的教育」と題して、教育に関する私の処女講演を試みたのであった。²³⁾

小西は、芸術的教育と労作教育の両方に刺激を受け、両者を統合するような形で、芸術的教育を生徒児童の実践的教育の場に取り入れていこうと考えたわけである。さらに言えば、小西にとって芸術的教育は労作教育の中においても実現可能なものとして捉えられていったということである。彼がこのように芸術的教育と労作教育を結びつけるようになった背景には、児童の自発的活動ということに関心を抱いていた小西と留学中のフォルケルトとのやりとりがあるのではないだろうか。少し長くなるが、小西の回想を引用したい。

フォルケルト先生の話によって刺激を受け、私は教育を歴史的に研究せんとする気になった

のであります。……中略……何かしなければならぬと一生懸命に思っている所に、「児童の自発活動」ということに就いて研究してやろうという考が起ったのであります。「児童の自発活動」を研究せんには、「活動」とはどんなものか、之を先づ研究の対象とせねばならぬ。各種の方面から書籍もあさって見て極力研究したが、半年位も経過したのにまだわからなかったのであります。そこで困ってしまって遂にフォルケルト教授に逢って事情を御話すると本問題に就いて研究せんとせば恐らく君の一生涯をかけても尚足りないであろう。けれども取敢えずは「活動」の問題に対しても何とか解決をつけねば、それより先に研究を進められないではないかとの言葉もあり、兎も角、其当時の私の力の及ぶ限りに於て何とか考えを纏めることに努めたのであります。拙著『学校教育』の中に「身体と精神」の關係に就て述べた点がありますが之は此の時の研究の副産物であつたのであります。²⁴⁾

「児童の自発活動」への着眼が、学校教育における身体を動かす活動、すなわち「劳作教育」へとつながっていったわけである。実践的な活動を通じた教育を構想していくきっかけはやはり、フォルケルトの示唆にあったと言えるのではあるまいか。長田新は小西を「吾が国における劳作教育論の最高権威」と絶賛しているが²⁵⁾、小西重直が劳作教育に関心を抱くきっかけとなったのが、彼のライプチヒ大留学であり、なかなづくフォルケルト教授からの教えなのであつた。何より小西自身も、1934年に行った講演の中で、相容れない点があるとしながらも「私は思想的にフォルケルト教授の影響を受けています」と語っている。因みに、この講演を単行本化した『私の生活と教育思想』では、「留学時代」と題する11ページほどの一節があるが、そのうち半分は自分とフォルケルトとの関わりについて記し、残り半分は決闘事件についての回想である。そして、決闘事件もまた、小西のフォルケルトに対する深い思慕と無関係ではない。²⁶⁾

いっぽう蔡元培は、留学中や帰国直後には「勤勞学校的教風等の研究問題」には大して関心を持たなかったようである。当時の中国にはまだ学校そのものがほとんど存在していなかったから、学校における劳作教育のイメージそのものが掴めなかったこともあっただろうが、そもそも「Arbeit」（労働）と教育とが結びつけられるなどとは、当時の中国人知識人には思いもつかないことであつた。『孟子』のなかに次のような有名な一節がある。

勞心者治人 勞力者治於人、治於人者食人、治人者食於人、天下之通義也。

（心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる、人に治めらるる者は人をやしない、人を治むる者は人にやしなわるるは、天下の通義なり。²⁷⁾

頭脳を使う者は肉体を使う者を支配し、肉体を使う者は頭脳を使う人に支配されるのは天下の道理であると考えような労働蔑視の觀念が牢固としていた当時の中国において、労働を通して学ぶという考え方が、中国の教育界に受け入れられそうにないと蔡元培は考えたのかもしれない。儒教を信奉している伝統的な中国知識人にとって、食事の時に使う箸と字を書くときに使う筆のみが手にしてよい道具であり、額に汗して働くというのは知識人の沽券に関わることであつた。もっとも、蔡元培自身は労働蔑視といった考え方からは遠く、のちの北京大学総長時代、周囲から奇異の目で

見られながらも、大学に出入りするたびに守衛らにいちいち挨拶していたし、北京大学で働く用務員のために「校役夜班」と称する夜間学級を開設している。しかし、20世紀前半の中国は、労働を通して学ぶという考え方を提唱できるような環境にはなかったのである。

蔡元培は、中国に帰国してまもない1912年1月、中華民国初代教育総長に就任するが、当時の中国では学校教育がまだ整備されておらず、ドイツで唱えられていたような勤労学校といったものを夢想することすら不可能であった。学校というものがなくても、青少年に働きかけるすべはないか？ 教室というものがなくても、彼らの精神を高められるものはないか？ 考えたすえに、蔡元培が辿り着いた答えが「美育」(美的教育)なのであった。彼は「美育実施的方法」(1922年)や「美育」(1930年)のなかで、彼の構想する美育実施の方法を詳細に論じているが、要するにそれは人間が生活していく場を美しく清潔にし、人々の精神を高めていこうとするものであった。生活環境全体を美化していかなければ、いくら学校や家庭で美育を施しても周囲からの悪影響によって台無しになってしまうというのが、蔡元培の考えであった。²⁸⁾

それにしても、感情移入美学などの提唱など当代一の美学者であったフォルケルトに学んだ小西重直が、美育を提唱するのではなく労作教育の普及に関心を寄せ、ヴントに実験心理学を学んだ蔡元培が中国帰国後は美育の提唱者として知られるようになったことを顧みると、人間というものの面白さを感じずにはいられない。それは、同じような教育の場におかれても、教育を受ける側一人一人の個性やバックグラウンドの相違によって、学び取るものが異なってくる、という言わば当たり前のことではあるのだが。

注

- 1) 「伝略」、『蔡子民先生言行録』、5頁、(北京大学)新潮社、1920年。
- 2) 「為自費游学德国請学部給予咨文呈」；『蔡元培全集』第1巻、452頁、浙江教育出版社、1997年。
- 3) 「伝略」、前掲『蔡子民先生言行録』、18頁。
- 4) 小西重直「教育研究の懺悔」；『学校教育』昭和3年1月新春特大号、6頁。広島高等師範学校 教育研究会。
なお、小西重直の元々の文章は旧漢字・旧仮名遣いによって書かれているが、引用に際しては常用漢字・現代仮名遣いに改めている。
- 5) 長田新『教育改造』；『小西重直の生涯と思想』、49～50頁所引による。
- 6) 小西重直「教育研究の懺悔」；『学校教育』昭和3年1月新春特大号、6頁。
- 7) 加藤仁平『小西重直の生涯と思想』、49～50頁。なお、熊谷五郎については、倉知典弘「ドイツ社会的教育学と社会教育——熊谷五郎の教育論から」を参照した。；京都大学『生涯教育フィールド研究』2018年。
- 8) 小西重直「教育研究の懺悔」；『学校教育』昭和3年1月新春特大号、6～7頁。
- 9) 小西重直「私の教育思想を辿りて」；『教育』第2巻第1号、74頁、1934年1月、岩波書店。
- 10) 『めざまし草』(1898年～99年)；権藤愛順「明治期における感情移入美学の受容と展開：『新自然主義』から象徴主義まで」；『日本研究』43巻、143～190頁、2011年。
- 11) 小西重直『現今教育の研究』、『小西博士全集』第二巻、266～7頁、玉川学園出版部、1935年。
- 12) 小西重直「私の生活と教育思想」、48頁、宮崎県教育会、1935年。(昭和9年7月末、小西重直が宮崎県で行った講演の記録を単行本にしたもの)
- 13) 蔡元培「我的読書経験」、1935年執筆；『蔡元培全集』第8巻、31頁。
- 14) 蔡元培「民族学上之進化観」、1934年執筆；『蔡元培全集』第7巻、626頁。
- 15) 蔡元培「自写年譜」手稿、高平叔『蔡元培年譜』、23頁、中華書局、1980年。
- 16) 前掲「伝略」、『蔡子民先生言行録』、18頁。

- 17) 陶英恵『蔡元培年譜(上)』;中央研究院近代史研究所專刊、1976年、台北。
- 18)「自写年譜」手稿、高平叔『蔡元培年譜』、23頁。
- 19)「自写年譜」手稿、高平叔『蔡元培年譜』、26頁。
- 20)「自写年譜」手稿、高平叔『蔡元培年譜』、25頁。
- 21) 小西重直「教育研究の懺悔」;『学校教育』昭和3年1月新春特大号、7頁。
- 22) 小西重直『現今教育の研究』、『小西博士全集』第二卷、261頁、玉川学園出版部、1935年。
- 23) 小西重直『劳作教育』、3-4頁、『小西博士全集』第三卷、玉川大学出版部、1935年。
- 24) 小西重直「教育研究の懺悔」;『学校教育』昭和3年1月新春特大号、7～8頁。
- 25) 長田新『哲学研究』、加藤仁平前掲書所引による、158頁。
- 26) 前掲、小西重直『私の生活と教育思想』、42～47頁が「フオルケルト教授」、48～53頁が「決闘事件」である。
- 27)『孟子』巻第五「滕文公章句上」、例えば、『孟子(上)』(岩波文庫)207～208頁。
- 28) 蔡元培「美育」(1930年執筆)、『蔡元培全集』第6巻、599～604頁。なお、蔡元培の美育論の詳細については、拙稿「蔡元培の美育論」(『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』、汲古書院、1986年)を参照されたい。なお、ドイツの芸術教育運動では芸術教育によって美術工芸品の質を高めるなど何らかの実利的側面も考慮されていたが、蔡元培はそのような考えも取り入れはしなかった。